

随 想

む か し び と

安 藤 卓 雄*

Recollections of the Late Seniors

Takuo ANDO

広辞苑によれば、むかしびと（昔人）とは、(1)昔の世の人、古人、(2)死んだ人、(3)年老いて時勢にうとい人、昔気質の人、などをいう。さしずめ私などはこの(3)の範疇に入りかけているわけであろう。すぎ来しあとをかえりみると、憂も喜びもわから合つた友や難しいプロジェクトでともに汗と涙を流した若い人々のメモリーとともに、時代にさきがけてわが国の鉄鋼技術の進路を確立された先輩のお姿が、わけても慕わしくクローズ・アップされる。これら諸先輩はまたおしなべて、沈勇、情愛ならびにユーモアを兼備されており、折にふれて無言のうちに私どもを薫化されることが多かつた。いまここに、当協会と関係の深かつた方々のエピソードを書きしるし、花橘のかおりによせて昔人の遺芳をしのびたい。

昭和16年12月8日の朝、前夜おそくまで勉強していた私は、起きぬけに下宿を飛び出して学校への道をいそぎ、本郷通りにさしかかった時、はじめて戦争の勃発を知った。街頭のラジオは、日本が西太平洋上において米英両国と戦闘状態に入り、わが海軍航空部隊はハワイに決死的大空襲を敢行した旨を、くり返し告げている。いよいよ来るべきものが来たのだ。しかし鉄鋼年産400万tの日本が、果して年産1億tのアメリカと互角に戦えるのか……。私ども学生は、重い心を抱いて鉄冶金学の講義室へ集った。

鉄冶金学担当の吉川晴十博士は、定刻きつかりに、ノートをかかえて教壇にのぼられた。先生は、造兵科士官のさきがけとして海軍に身を投じ、多年にわたり特殊鋼の研究と生産を指導された後に、教授として母校に帰られた方である。さぞやこの重大な開戦の朝には、戦時下の勉学態度につきご訓示があるだろうと、みな緊張して先生のお顔に注目した。

しかし先生は、ノートをひらきチョークをとり上げられると、ただちに前回の講義の続きに入れられ、2時間の講義を淡々と述べ終わられると、そのまま静かに教室を去られたのであつた。

おお！ これこそ Silent Navy の真骨頂だ！ 先生は学生たちに、いたずらに軽挙妄動せず、ひたすら自らの本分をつくす事を啓示して下さつたのだ、と私たちは肝に銘じた。この感動は、それから終戦までの苦難にみちた日々において、私をみちびく灯の1つとなつた。

私はやがて技術士官として呉海軍工廠に配属せられ、吉川先生のご業績の一端を親しく拝見することができた。また古い人々からは、先生が実験に従事する工員の待遇改善に努力されたこと、また休憩時間中のスポーツ奨励により、とかく引きこもり勝ちな実験屋の体力維持に意を用いられたこと、などの逸事を伺つた。

やがて大戦もおわり、鉄鋼協会会長の任期もおえられた先生が、私の当時奉職していた北大の視察にお出でになつたとき、札幌の街路を散歩しながら、私はそのかみの開戦の朝の無言のご教示に対して、あらためてお礼を申しあげた。そのとき先生は、いつもの温顔にすこしシャイな笑みをうかべられて、

「あの時は、私もまだ開戦のニュースを聞いていなかったんだよ」

と静かに答えられたのであつた。

私は、いよいよ先生への敬慕の念をふかくした。

あの大学紛争もたけなわの頃である。八幡製鉄副社長・湯川正夫博士は、しばらく東大病院に入院しておられた。それは、多年の国内外における激務に加え、鉄鋼協会会長の任も果たされたあとに手術もうけられたので、心身を調整されるためであつて、昼間は出社せられ、夕刻には病院に戻られるというふうなものであつた。

昼は人通りも多く、若い人々の声がこだまする学内も、夜はひっそりと静まりかえり、入院病棟では時々廊下を歩く看護婦さんの足音しか聞えない。そんな静かなある夜ふけのことである。

湯川博士の病室のドアがコツコツとノックされて、音もなくすこし開けられる。誰かが外にたたずんでいる。しかし入つて来る気配はなく、やがてドアは音もなく閉

* 東洋鋼板（株）常務取締役 工博

められた。

次の夜もまた同じことが繰り返される。その次の夜もまた同じで、博士が呼ばれても入って来ない。

しかしある晩、ついに意を決した訪問者がおずおずと入って来た。彼は若い医局員である。

「何べんもためらいましたが、ぜひ話を聞いていただきたくて参りました。大学病院内部の断絶状態はまことにひどいものです。あなたは技術の大指導者であられ、また大会社の経営者でもあられますので、私たち若い医学者の苦悩をお聞きねがい、判断していただきたく存じます」

と前置きして、彼は医局内の実状に対する意見を縷々申し述べた。博士もまたこれにこたえて、諄々と彼をさとされた。

「聞いてみると、学生や若手医局員にも悪い点があるが、たしかに先生側にも改めるべき点が多い。すみやかに双方が反省・向上し、学園の真の姿に復帰できるよう、我々も力をかせねばならない」

と、博士は冶金学科同窓会の席上での、このお話をしめくくられた。

この時の博士は、十分な休養のために大へんお元気で、また永く日本の鉄鋼技術のリーダーとして、私たちを導いていただけのものと、みな確信していた。しかし天はこの知情兼備の大指導者に寿をかさず、その1年半後に、博士はにわかにこの世を去られたのであった。

告別式の時は、さわやかな秋晴れだった。菊花のパネルにかこまれたお写真に献花するとき、あの若い医学生もきつと、博士のご逝去をいたみお言葉をしのんでいる事であろうと思った。

学窓を巣立つて、最初に着任した職場とそのボス（もちろんよい意味での）は、何といつても一番思い出が深い。集合教育を終えて、呉海軍工廠製鋼部に配属された私たちは、製鋼部長・佐々川清博士の指導下に、鉄鋼技術者としての第一歩を踏み出したのである。佐々川博士は、吉川先生の衣鉢をうけつぎ、特殊鋼の研究・開発者として令名高く、学振、“鉄と鋼”などで数々の業績を発表されており、また傘下に数多くの俊秀を育成されておられた。当代の特殊鋼研究者・技術者のトップレベルに、その頃の呉製鋼部在籍者が多く名を連ねておられるのも、故なしとしない。新米の私たちも、佐々川部長はじめ諸先輩の親切なご指導により、このファミリーの末っ子たちの仲間入りをした次第であった。

さてわが佐々川部長は、シャープに仕事を切りまわされつつも、いつもお顔に笑みを忘れず、off the jobでは私ども若僧にも気安く声をかけられ、着こなしもスマートなら、フランス映画がかかると、奥様と二人連れでかかさず見にいかれるとか、どうも無骨な軍人流でないと思っていたら、やつぱりこれは本場のフランス仕込み

なんだということを、先輩から承わった。

戦後も博士は、呉製鋼部関係者の中心となられて、いろんな集まりを主宰しておられたが、数年前に私のところに立ち寄られた際に、お年をとられてもいよいよ元気な笑顔で、フランス留学の思い出話をして下さった。

「僕が海軍の依託学生（理工科系の学生の志願者からえらばれる）になつた後に、議会で尾崎行雄さんが軍備縮小の大演説をやりましてね。それを聞いて、もう海軍をあきらめて、工科もやめて理科に入りなおそうと思つて海軍省艦政本部1部のX部長に、この考えをお話したんだよ。するとX部長が“そんな事はいわずに、海軍に入つた後に、好きなようにやれ”といわれたので、そのまま依託学生をつづけ、大学を卒業して呉に行きました。

そうしたら1年あとにフランス留学の辞令が出た。僕はもとより、上司もみんな驚いたが、これがX部長のご配慮なんだねえ。

パリの大使館にたどりついたら、武官が“こんなところに居てはフランス語は上達しない”といわれ、日本人が1人しかいないツールの大学にいかされました。3か月たつたら、よくしたもので言葉が通じるようになったよ。

それで気をよくして、本職の勉強のかたわら、フランス生活を楽しんでいたら、大正12年9月に、“日本は大地震で全滅”というニュースで、僕はこれから一体どうなることかと思つた。なにしろ、手紙が50日もかかる時代で、真相がなかなかわからない。そのうちに震災は関東の一部だけとわかり、やつと安心したよ。

そのころもパリには、日本からいろんな人がやつて来たけれど、一番の豪傑は、やつぱりY元帥だったねえ。」

欧州視察旅行の途次、パリに立ち寄つた当時のY中佐は、佐々川造兵中尉の案内で、パリ市とその近郊を観光した。ノートルダム、ルーブル、ソルボンヌ、アンバリードなど歴史と美術に代表されるのは昼のパリであり、夜のパリは、ムーラン・ルージュなどで知られるみやびの都である。中佐は中尉の日夜をわかつた親身のガイダンスにより、心ゆくまでパリ滞在を楽しんだ。

10数年の星霜は、またたく間に経過した。佐々川部長が心血をそそいで開発した新種装甲板が、戦艦大和、武蔵のために製造を終えた頃、旗艦長門にひきいられた連合艦隊主力が呉に入港すると、司令長官から製鋼部長に案内があつた。

<今晚おひまならば、吉川亭にお越しいただきたい>

「行つて見たらば、Y司令長官が幕僚をひきつれて待ちうけていてね、さつそくこう言われた。

“あのときパリでは、まことにお世話になりました。お礼のしるしに、パリ美人ならぬ日本美人のお酌で、心ゆくまで飲んでくれたまえ”」

その席にはべる美人たちの名は、梅子、松枝、小桜でありました……というのはもとより筆者の“わるのり”である。